偶感

及川ふみ

漢口へ〳〵と進撃する皇軍の目覺しい奮戰振りを、朝のニュースで聞き終へて、皇軍將士への感謝の念を一層深くしながら門を出ると間もなく、向ふから十數人の白服の兵隊さんの一行が歩いてこられるのが見えた。この横道などへどうしたことかと不思議に思ひながら歩いてゐるうちに、だん〳〵近づくと、左或は右の片足が義足である方々ばかりである事に氣づいて、はつとした。すれちがつた時には感謝の氣持が一ぱいで、一人一人の方々におのづから頭が下つた、勇士たちも皆にこ〳〵して答禮して下さつた。往きすぎて幾度か振りかへつて元氣に歩いてゆかれる後姿を見送つた。陸軍病院に療養されてゐる方々が近くのこのあたりに歩行練習に散歩せられるのかと思はれた。あゝあの方々はどこの戰場で傷つかれたのであらうか、あの傷はいつの戰のであつたであらうか。今日あの元氣な樣子で、杖をもからずにうれしそうに歩いておられるが、あれまでに快癒されるまでの、長い間の心身の苦痛は如何ばかりであつたであらうなどゝ次から次へとこの勇士たちの事が考へつゞけられた。

今全國の病院に我々のために戰つて下さつた名譽の傷病兵が數多く病を養つておられる。今更ながらにこの方々に滿腔の感謝の念が湧きおこるのである。大にしては傷兵保護院などの國家的の施設によつて、この勇士方に對して更生の道が講じられ、それ〳〵慰安の途も多々ある事であるが、この事變の渦中にある銃後の我々が痛切に感じたこの白衣の勇士達への感謝感激は、やがてはこの傷痍の勇士方への尊敬の念となるのである。

幼稚園では幼兒たちにもこの勇士方への慰問慰安の出來る樣に、各地の幼稚園で誠心誠意種々の方法をとつておられることであらうが、これと同時に、のびゆくこの幼い人たちの腦裡に、現在の慰安と同時に、この傷痍の勇士に對する尊敬の念を培ふ事が今の我々の忘れてはならない最も大切な務であるのであらう。

ながい夏休みも、終りに近づいて、九月の聲をきくと、子供達もさぞ幼稚園の始るのを待ち遠く思つてゐる事であらう、いやそれよりもお母さん達がそれ以上にまたれる事かもしれないなど考へられる。

七月九日幼稚園の第一期終了式がすんで、幼兒たちの長い休み中の健康をいのりつゝしばらくのお別れをした。その後自分たちは勤勞作業に、講習に、毎日幼兒のゐない幼稚園に通つた事である。

園庭に幼兒と一緒に作つてゐる蔬菜類も日毎にのびてゆく。トマトが實り、茄子がなり、里芋、甘藷は株がはり、かぼちやは大きなのが三つも出來た。九月、幼稚園が始るまでとつておけるものは皆そのまゝにしておいて、幼兒たちに見せたいと思つてゐた。はからずも九月一日の大あらしで、蔬菜どころか園庭の樹木の多くは根こぎにされてしまつた。九月十日再び勤勞作業で本校の生徒たちと一緒に園内の草取りをした。かうして幼兒たちの來る日をまつた。

九月十二日、幼兒たちは朝早くから嬉々として三々五々登園して來た。この日は思ふだけ遊ぶ暇もなく式後は直ぐに歸つていつた。翌日からの幼稚園は短縮であつたが、幼兒たちには、唱歌もいらなければ、お話もいらない。遊戯もしなくてよい、手技も亦いや。たゞ〳〵お友達と遊びたいこのことだけなのである。朝來ると互にお庭に飛び出して遊びはじめる。堰を切つた水が迸る樣な勢でお友達同志結びついて遊んで居る。二三日はただ遊びたいだけ遊ばせて、しばらくはその樂しそうな樣子をたゞ茫然と眺めてゐた。海に山に樂しい數旬日を過して來たこの幼兒たちにもいろ〳〵面白いことゝ樂しい遊びも數々あつたであらうになどゝ考へられた。

こゝでしみじみ考へさせられた。幼兒たちはほんとに五分五分に遊べる友達が第一等の友達なのであらう。長い休みの間この五分五分に遊べる第一等の友達にかけてゐたのではなからうか、年齢の上においても、境遇の上においても、對等に遊び得られる友達ほどよい友達はないものである。この點今更ながら幼稚園がこの人たちの樂土である事を痛感する。又これと同時に我々保姆が如何にこのよき相手の中に交つてその樂しさを損はない樣にする事である。